新入会員歓迎講演

暴力とその克服

――ティク・ナットハンの「どうか私の本当の名前で呼んで下さい」を手がかりに

ロバート・F・ローズ

おはようございます。本年度仏教学会の会長を務めることになりましたロバート・ローズです。本日の講演のタイトルとしまして「暴力とその克服―ティク・ナットハンの『どうか私の本当の名前で呼んで下さい』を手がかりに」を掲げておきました。皆さんのお手元に資料が回っていると思いますが、これが今日お話しする「どうか私の本当の名前で呼んでください」という詩です。これを題材にしてお話をさせていただきたいと思います。

「暴力とその克服」が今日のタイトルですけれども、一口に暴力と言いましてもいろんな形の暴力があります。日本では現在、どこをみても暴力が遍満しているような感じを受けます。勿論、凶悪犯罪も多く見受けられます。今朝もテレビのニュースでは、資産家の姉弟が急に消息を絶ち、その人たちの預金通帳からお金が引き出されていたので家を調べたら、そこには血のあとがあった、という報道がありました。なにかの凶悪犯罪に巻き込まれたのでしょう。現在日本ではそんなことが日常茶飯事になってしまっています。そのような事件が起こっても、もう誰も驚かない状況になってしまっています。

そして凶悪犯罪だけではなく、ドメスティック・バイオレンス、日本ではＤＶとか家庭内暴力といいますか、それもかなり多いですね。これは日本だけに限られることではなくて、欧米でもＤＶの事件が多くあります。最近、長澤まさみさんが主演しているテレビドラマでもＤＶを題材にしているようですが、テレビのドラマで取り上げられるほど家庭内暴力は日本で大きな社会問題となっています。また、「いじめ」も日本の大きな社会問題ですが、いじめも暴力の一種といえるでしょう。肉体的な暴力にはならないにしても、れっきとした精神的暴力です。まさに悪質な暴力の一つだと思います。このように日本ではどこを見てもいろんな形で暴力が行われ、それが大きな社会の問題になっています。暴力のない社会を作っていきたいというのが、私たちみんなの共通した願いであると思いますが、そのような社会を実現させるのは大変なことです。

このように、さまざまな種類の暴力がありますが、今日はそういう暴力ではなくて、もう少しグローバルな視点から暴力を考えてみたいと思います。個人と個人の間の暴力と言うよりも、集団とか国家の間の暴力といえるようなものについて考えてみたいと思います。たとえば、その一例として民族紛争を挙げることができます。またパレスチナでは、いま壮絶な争いが起こっていますが、そういうこととか、国際テロとかがあります。そしてアメリカが推し進めているテロとの戦いも暴力の一種でしょう。そういうことを念頭に置きながら「暴力とその克服」ということについて考えていきたいと思っています。

実はこの「暴力とその克服」ということは、この数年のあいだ、私にとってどうしても整理しておかなければならない課題となっています。ご存じのように私はアメリカ人です。そして、自分で言うのもおかしいですが、私はアメリカ人としての誇りを持っていますし、愛国心も持っています。しかしこの五、六年のあいだ、アメリカ人であることを悲しく感じることが多々あります。それは過去数年間のアメリカの外交政策を見ていますと、あたかも飛行機から爆弾を落とすように、アメリカは世界中に苦しみの種をばら蒔いているように感じてならないからです。しかした

だ「悲しい状況だ」といっていても問題は解決しません。かつて、一八四〇年代のことですが、ヘンリー・ソローというアメリカの作家が「市民の反抗」(Civil Disobedience)というエッセイのなかで、本当の愛国心とは自国の取った政策を無批判に支持することではなく、誤った政策を取ったとき、勇気を持ってそれを批判することだ、と述べていました。私は今のアメリカ政府の政策は誤ったものだと考えていますが、それをきちんと批判していくことこそ、アメリカの市民として、そして大学で教鞭を取っている一人の知識人としての義務だと思っています。その意味で、私にとって「暴力とその克服」という課題は、どうしても考えなければならない課題になっているんです。

今アメリカは世界中に苦しみの種を蒔いていると言いましたけれど、それには理由があります。皆さんお分かりと思いますが、その理由は九・一一のテロです。二〇〇一年の九月十一日、アルカイダというテロリストの集団が四機の飛行機をハイジャックして、そのうちの一揆をペンタゴンに、二機をニューヨークにある世界貿易センタービルに激突させ、建物を崩壊させました。皆さんも、そのときの映像をテレビなどで見て、よく覚えていると思います。世界貿易センタービルの悲劇では、三千人以上の方が命を亡くしています。その時、世界貿易センタービルには二万人ほどの人がいましたが、そのうち一万七千人ほどの人が無事に逃げることができたのですけれど、三千人以上の方が亡くなってしまいました。

私はこの事件によって特に大きな衝撃を受けました。その理由は、私の父親があの世界貿易センタービルで長いあいだ働いていたからです。幸運にも、九・一一のとき、父は既に定年退職してビルにはいませんでしたが、世界貿易センタービルには北塔と南塔があって、その南塔の八十八階の非常に見晴しのいい場所にある日本の企業で父は長年にわたって働いていました。ですから私もあのビルができた当時からよく遊びに行っていました。そして、たまたまテロが起こる一週間位前に、私の家族四人で夏休みにニューヨークへ行き、あのビルをおとずれていました。最上階の展望台からのすばらしい眺めは今でも忘れられません。しかし日本に帰り、一週間経って、夜一〇時頃、テレビを

つけたら、あのテロが起こっていました。

この九・一一のテロはアメリカに大変大きな衝撃を与えました。衝撃と言うよりもトラウマを与えたといったほうが、より分かりやすいかもしれません。アメリカではこれほど大規模なテロはかってありませんでした。アメリカはヨーロッパや日本と違い、戦争での空襲などは経験したことがありませんので、そういう意味ではこれはアメリカが経験した史上最大の暴力的事件です。そのためアメリカは、計り知れない衝撃を受け、トラウマのような状況に陥ってしまいました。そしてアメリカ人、特にブッシュ大統領はテロに対する底知れぬ恐怖を覚え、アメリカをテロリストから守らなければならないと言って、テロ撲滅の戦いを始めたわけです。その一環としてアフガニスタンで戦争を起こして、アルカイダをかくまっていたタリバン政権を倒し、さらにはテロとの戦いを大義名分としてイラクに攻め入り、サダム・フセイン政権を倒しました。ご存じのようにフセインは拘束されて死刑になりましたけれど、当初からイラクではテロが起こり、全国が混乱に陥り、今ではどうしようもない泥沼状況になっています。数字を見てびっくりしました。インターネットで見たのですが、フセイン政権が倒されてから、アメリカ兵の死者は四千人に達しているそうです。また負傷者は三万人ちかくいます。そして更に百二十万ものイラクの人々が亡なっています。これはどう考えてもすごい数です。アフガニスタンでもタリバン政権は崩壊しましたけれども、今でも内戦が続いていて、同じような状況が続いています。

このように、過去数年のあいだブッシュ大統領が行ってきた外交政策をみてみますと、そこには一つの基本的視点といいますか、構図があるように思えます。それは非常に単純な構図です。彼らの言うところは「私達は善、私達に反対するものは悪。アメリカは正義である、そしてそれを脅かすテロというものは悪である」というものです。そういう二者選択の考え方に基づいて外交政策を世界的に展開してきています。仏教的に言いますと、二元的な「分別」の思考がそこに潜んでいるといえるでしょう。

ここで一つ考えなければならないことがありますが、それはアメリカがテロとの戦いを正当化するために、「正義」という言葉をキーワードとしているということです。日本の皆さんはどうでしょうか。「正義」という言葉を聞いてピンときますか。日本の方々からすると、「正義」という概念はかなり抽象的で、何かあまりよく分からないというか、言葉自体は当然理解しているが、あまり日常生活では馴染みのない、ピンとこない言葉のように思います。しかし、アメリカ人にとってはそうでなく、正義とは日常的に使用されて、日常生活のなかでもしばしば使われる言葉です。つまり、これは日本とアメリカとの大きな違いだと思いますが、正義という概念はアメリカ人にとっては非常に大切で、自分たちの生活を営んでいくうえで基本概念の一つなんです。日本の人々には抽象的に思えても、「正義」はアメリカの人々にとっては身近な概念です。そういう「正義」というものが、ここ何年間かのアメリカの外交政策のベースにあります。

この正義という考え方はキリスト教からの影響が非常に強いものです。ご存じのようにアメリカはキリスト教大国です。四割の人が毎週教会に行くような国です。そして、今挙げた「正義」はキリスト教の一つの基本的な概念になっています。それは聖書の中に、特に旧約聖書のなかで強調されています。もちろんキリスト教では正義だけが強調されているわけではありません。特に新約聖書では「神の愛」が説かれ、キリスト教の慈善事業などの非常に素晴らしい活動の基になっています。マザー・テレサの活動なども、キリスト教の「愛」の実践です。ですから「正義」と「愛」の両方があってはじめて、キリスト教の持っている本来のすばらしさが実現されるのだと、私は思っています。

しかし、この数年間のあいだ、アメリカの政策は「正義」のみに偏執し、「愛」の伝統を忘れているように思います。その結果、「正義」自体が歪曲されている状況にあるといえます。とにかく正義・非正義や善・悪を二元的に捉えて、我々は正義で善であると受け止め、我々を脅かすものは非正義で悪という形で外交を行っているわけですね。そういう考え方に立ちますと、当然のことながら、我々は正義であると自己を正当化し、正義で善の我々を守るため

には悪を抹殺しなければならないという考えが自然に導きだされてきます。そしてアメリカの外交は、そのような考えに従って実行され、他者に対して暴力を加えることを正統な政策であると主張しているわけです。このように非常に単純ではありますけれども、ある意味では非常に分かりやすい、支持しやすい政策をアメリカが採ってきています。しかし暴力は新たな暴力を生み、無限に暴力の連鎖を生み続づけることになるわけです。もはや誰が見ても、このような政策は失敗しています。それはブッシュ大統領自身でさえ、もうすうす気がついていると思います。

では、このような暴力の連鎖というものをどうやって断ち切って、暴力を克服することができるのでしょうか。それは善・悪とか正義・非正義という、二元的なものの考え方から抜け出さなければ実現することはできません。そしてそれには、結論からいいますと、仏教でないとだめなのではないかと思いますね。既にいいましたが、仏教ではこのような二元的思考を「分別」といい、そのような考え方を批判し、それを乗り越える道を説いています。ですから仏教は、ますます世界の平和に貢献していかなければならないと考えています。その仏教がどういう形で貢献できるのかということを端的に示しているのが、このティク・ナットハンの「どうか私の本当の名前で呼んでください」という詩ですので、この詩について少し見ていきたいと思います。

さて、先にも言いましたように、この詩を書いた方はティク・ナットハン（Thich Nhat Hanh）という人です。皆さんの中でこの人の名前を聞いたことがある人がいましたら、手を挙げてくれますか。一人、二人ですか。実際、ティク・ナットハンは日本ではあまりよく知られていない人です。しかし西洋では非常に有名な方で、ダライ・ラマと同じくらいの知名度を持っているといっても過言ではない人です。

このティク・ナットハンですが、彼はベトナムのお坊さんです。一九二六年に生まれていますので、今年（二〇〇八年）で八十二歳になります。ティク・ナットハンという名前ですが、余談になるかも知れませんが、漢字で表記しますと、釈一行と書きます。ティクが釈です。ご存知のように、中国の釈道安のときから、中国や日本を初めとする

東アジアのお坊さんたちはみなお釈迦様の家族だという意味で、自分たちのことを「釈」と名乗っています。そしてナットハンは「一行」、一つの行です。そういう名前だそうです。本人は自分のことを英語でワン・アクションと名乗っておられるそうですが、名前の由来はそういうことです。

この方はベトナムで生まれて、十六歳でお坊さんになりました。ベトナムの仏教は中国仏教の影響を非常に強く受けています。そして禅宗が非常に力を持っていて、ティク・ナットハンも臨済禅の系統に属し、禅宗の修行をされた方です。しかし、順調に勉強、或いは教団の中の仕事をしていたわけなんですけれども、ベトナム戦争に巻き込まれます。皆さんはまだ生まれる前の事だと思いますが、私は当時高校生だったので、ベトナム戦争についてはよく覚えています。非常に悲惨な戦争でした。それはベトナムの国を二つに分けた内戦でした。ベトコンというゲリラ軍と政府軍との間で、ベトナム全土で戦争が起こったわけですね。そういうような状況に直面して、ベトナムの僧侶たちの多くは戦争に反対する運動を展開しました。例えばどこかで戦いがありますと、そこで行って敵・味方を分け隔てなく負傷者を看病するようなことを行いました。或いは有名なことですが、焼身供養をして戦争に反対もしました。政府の建物の前に行って、そこで座禅を組み、精神統一が出来たら、頭からガソリンをかぶって火を付けて、文字通り身を以て、つまり自分の一番大事な命を捧げて戦争に抗議するわけです。

ティク・ナットハンはそこまで過激な行動はとりませんでしたが、戦争に反対する運動を起こして、最終的にはベトナムから追放されてしまいました。それ以降はフランスで僧院を作って、そこで生活しています。同時に世界各地を訪れ、仏教の教えを世界中に広めようと活動してもいます。

資料にEngaged Buddhism（エンゲイシド・ブッディズム）と書いています。これは適切な和訳がないので、そのまま英語で書いてあるわけなんですが、「社会と関わる仏教」とでも訳していいのではないかと思っています。つまりEngaged Buddhismとは、社会の中にあるさまざまな問題、例えばホームレスとか戦争とか、いろんな社会問題に

積極的に関わることによって、自分の宗教性を高めていこうという、そういう目的を持った実践的仏教です。このEngaged Buddhismという運動は、最近日本でも徐々に注目されつつありますが、この言葉を最初に使ったのがティク・ナットハンです。そしてティク・ナットハンはEngaged Buddhismの実践者として、世界的に有名な僧侶です。長いあいだ彼はベトナムに帰ることが許されなかったのですが、三年前の二〇〇五年に、追放後初めてベトナムに戻ることが出来たと聞いています。この「どうか私の本当の名前で呼んで下さい」という詩を書いた人はこういう人です。

では、なぜこの詩を書いたのかということですが、そこにはある悲しい話があります。この詩は、詩と同名の「どうか私の本当の名前で呼んで下さい」というエッセイに収められているものです。具体的にいえば、このエッセイの冒頭に出てきている詩です。そのエッセイを見ますと、ティク・ナットハンがなぜこの詩を書かざるをえなかったか、その理由が書いてあります。さらに、その理由については詩のなかにも、具体的にいうと下から五段落目のところにも言及されています。

ご存じのように、南ベトナム政府は一九七五年に内戦で負けて、首都サイゴンが陥落します。そして南ベトナムは資本主義から社会主義へと変わっていきます。その時に、身を案じてベトナムから沢山の人たちが逃げ出しました。ベトナムはジャングルに囲まれていて、陸路からは逃げられないので、みな海へ逃げました。でも、海から逃げるといっても、秘密に国を出なければならないので、舟に乗って、それも時には小さなぼろぼろの船に数百人という人が乗って、南シナ海の方に逃げていきました。香港に、フィリッピンに、タイへと逃げていったのです。これらの難民を当時「ボート・ピープル」と呼んでいました。七十年代の後半、沢山の悲惨な事件が世界中に起りましたけれども、このボート・ピープルの悲劇もそのうちの一つです。小さな船に沢山の人が乗っていますから、沈没してしまうことも多々ありました。さらに、そういう形で命を落とすだけではなく、時には海賊に襲われることもありました。今で

も東南アジアには沢山の海賊がいますが、昼間は普通の漁師で夜になると海賊になる人たちが沢山いると聞いています。そういう海族たちが難民の乗った船を襲い、難民の持ち物をすべて奪い、女性をレイプしたりすることが多くありました。時には船に火を付け、乗っている人々を皆殺しにすることもあったようです。その中で特に世界のメディアで取挙げられたのが、この詩の中で語られている十二歳の女の子です。十二歳の女の子の乗っていた船が海賊に襲われ、彼女はレイプされて、そのショックのために海に身を投げて自殺してしまいました。そういう出来事があったのです。

ティク・ナットハンはこれらボート・ピープルの救済運動を組織して、彼らの救出に乗り出そうとしたのですけれど、各国の当局の妨害によって計画が挫折してしまいました。そのような状況の中で、この十二歳の少女の悲劇が起きたのです。この悲劇を知ったとき、どうしようもない気持ちになって、それを何とか自分なりに理解しようということで、この詩を書いたと言っています。こういうような背景で書かれたのがこの詩ですが、皆さんそれぞれ自分で読んでみてください。出典はティク・ナットハンの『ラブ・イン・アクション』(Love in Action) という本です。

「どうか私の本当の名前で呼んで下さい」
どうか私は明日去ってゆくなどと言わないで下さい
私は今もなお　やって来ているのですから
深く見つめて下さい　私は毎秒やって来ているのです
春　枝先に萌ゆる蕾となって

真新しい巣で歌を習っている
いまだこわれやすい羽を持った　小鳥となって
花の芯にとまっている毛虫となって
そしてまた石の中にまだ隠されている宝石となって

私はやって来ているのです　笑い　また泣くために
そして恐れ　また希望を抱くために
私の心臓のリズムは　生きとして生けるものすべての
生と死です

私は川の面で変化している
かげろうです
そして私は　そのかげろうに襲いかかって飲み込んでしまう
小鳥です

私は　水の澄んだ池で楽しげに泳いでいる
一匹の蛙です
そして私は　音も立てずにその蛙を食べてしまう
ヤマカガシです

私は骨と皮ばかりで
竹竿のように細い脚をした　ウガンダの子どもです
また私は　人殺しのために武器をウガンダに売っている
武器商人です

私は海賊にレイプされたのち
海に身を投げる
小さな船に乗った
十二歳の難民の少女です
そして私は海賊です
私の心はまだ見つめること　そして愛することができないのです

私は大きな権力を手にした
党政治局員です
そして私は強制労働収容所のなかで徐々に死んでゆきながら
人民のために「血の負債」を支払わなければならない
男です

私の喜びは春のようにあたたかく

地上のいたるところに花を咲かせます
私の苦しみは　涙の川のようです
四つの海のすべてを満たすほどに　はてしなく広がります

どうか私の本当の名前で呼んで下さい
私の泣き声と笑い声のすべてを同時に聞くことができるように
私の喜びと苦しみが一つであるということがわかるように

どうか私の本当の名前で呼んで下さい
私の目を醒ますことができるように
そして私の心の扉を
慈悲の扉を　開け放つことができるように

（ティク・ナットハン著、滝 久和訳　『ラブ・イン・アクション―非暴力による社会変革』星雲社、一九九五より）

どう思いましたか。悲しい詩でしょうか。希望を与えてくれる詩でしょうか。難しいですね。いろんな事が渦巻いている詩だと思います。

この詩ですけれども、最初のところを読んでみますと、「どうか私が明日去って行くなどと言わないで下さい。私は今日もなお　やってきているのですから」と書いています。これは十二歳の女の子への追悼の言葉のように思います。十二歳の女の子は死んでしまった。けれど、死んでしまったからといって、そこで全てが終わったということで

はない。一つの生命が死んだけれども、いつもいつも新たな生命が生まれてきているのだ。このように訴えている文章です。そういう大きな循環の中で、この十二歳の女の子は生まれてきて死んでいったのだということから、この詩はスタートするんですね。そして次に「深く見つめて下さい　私は毎秒やってくるのです」とあります。新しい命が一瞬一瞬新しく生まれてくる。死というものはあるけれども、それを補うような新しい命が毎秒毎秒誕生している。そして、「春　枝先に萌える蕾となって」、あるいは赤ちゃんの「鳥」になって生まれてくる—そういう形で新しい命が循環の中で次々と生まれてきていると述べられています。そこで希望というものが少し出てくるのかと思います。死んでいくけれども、新たな命が続いていく。このような大きな命の循環のなかに私たちはいるのだと。そういうことを言おうとしているのだと思います。

ただ、そこまではいいのですが、その後、ちょっと暗い闇のようなものが見え隠れしはじめるのです。つまり、先にある種の希望を与えてくれそうな文章があったと思えば、次にエデンの園に蛇が入ってくるような感じを受ける文章が続づきます。例えば「私は川の面で変態している　かげろうです　そして私は　そのかげろうに襲いかかって飲み込んでしまう小鳥です」という文章が続きます。かげろうが生まれてきた。しかしそのかげろうが一生を完全な形で全うする保証は、どこにもないわけです。小鳥に食べられてしまうかもしれないのです。あるいは「私は蛙である」、つまり川の中で楽しく泳いでいる蛙である。でも、その蛙もヤマカガシという蛇が（英語ではgrass snakeとなっていますが）きて、ヤマカガシに食べられてしまうかもしれない。テレビの動物番組などでは、「これは自然の法則なんです」と言って、シマウマなどの動物はライオンなどの他の肉食動物に食べられるのが当たり前だと割り切って言っていますが、それはそうかもしれませんが、やはりシマウマにとって、自分がライオンによって殺されて食べられてしまうのは不条理なことだと思います。一生を全うしていないまに殺されるのは、動物の世界でも不条理で、受け入れがたいことではないかと思うんです。命がどんどん生まれてくるけれども、その一生が全うしないうちに命が奪

われる。しかしそれは自然界のことであって、自然の法則からするとライオンがシマウマを食べるのは当然のこととして受け止めようとするのですが、やはり人間の世界と同様に、命を奪われるのは不条理としかいえないでしょう。

次の段落に移りますと、ウガンダの子供の話が出てきます。皆さん、ウガンダの子供って分かりますか。これも昔の出来事ですが、アフリカのウガンダという国で部族間の戦いが起こりました。ある部族が他の部族を襲撃して、襲撃された方はみな隣の国に逃げだしました。逃げて行った先は難民キャンプです。そこにはろくな食べ物もなく、医療もなくて、子供たちが次から次へと餓死していきました。餓死して行くときのプロセスはご存知ですか。筋肉がなくなってしまって、手脚がお箸みたいに細くなって、その代わりにお腹が妊婦のようにふくらむのですね。平安時代に『餓鬼草子』という絵巻物が書かれましたが、ウガンダの飢えた子供たちの姿は、まさにこの『餓鬼草子』に描かれたいる蛾鬼の姿そのものでした。そして、そのような飢えの極限まで行くと、目もくぼんでしまい、意識も朦朧として、ついに死んでしまうんです。また回復したとしても、大きな後遺症が残るでしょう。そういう死の一歩手前の子供たちが、当時ウガンダの難民キャンプに数え切れないほどいました。

このウガンダの悲劇について書いた後に、ティク・ナットハンは十二歳の女の子のことを出しています。ちょっと読んでみます。

私は海賊にレイプされたのち
海に身を投げる
小さな船に乗った
十二歳の難民の少女です
そして私は海賊です

私の心はまだ見つめること　そして愛することができないのです

皆さんはこの一節を読んでどう思いますか。かわいそうだと思いますか。そうですよね。誰でもかわいそうだと思いますよね。この少女は十二歳で死んでしまいました。やっと将来が開けてきた時に死んでしまいました。しかもレイプされて。不条理だと思いますよね。だから普通の人はその女の子に同情し、その女の子を死に至らしめた海賊を憎むべき悪人として非難するわけです。これは当然のことです。

しかし問題は、この少女の経験したような悲劇を二度と起こらないようにするためは、海賊を抹殺すべきだという発想が、ここですぐ出てくるということです。世界を平和にするためには、つまり、この十二歳の少女が安心して生活できるような平和な世界を実現するためには、海賊に代表されるような世界の「悪」を根絶しなければならない、というのが世間一般の常識です。そしてこのような考え方こそ、現在ブッシュ大統領が推進しているテロとの戦いの根底に流れている発想です。しかし、これで本当に世界の平和はもたらされるのでしょうか。

ここで重要なことは、先にあげた詩の一節に、「私」は「十二歳の少女」であると同時に「海賊」でもあるということが述べられていることです。これは常識的には考えられない発想です。これは一体何を意味しているのでしょうか。いうまでもなく、この発想の根底になるのは仏教の縁起思想です。皆さんご存知のように、仏教では「縁」ということを言います。全てのものは実体としてあるのではなく、さまざまな因（原因）や縁（条件）によって成り立っているといいます。それを仏教では「縁起」といっています。一人ひとりの人間も同様に「縁起」によって成り立っているわけですが、この場合大切なことは、縁が変われば人間も変わるということです。そのため、今は道徳的に立派な生活をしていても、縁が変われば—つまり状況が変われば—だれでも他人に暴力を振るい傷つける存在になりうる可能性を秘めていることを意味します。「私は十二歳の少女であると同時に海賊である」という発想は、このことを

語ろうとしているのではないでしょうか。ティク・ナットハンは、自分を善人であると自負して疑わない私も、環境が変われば海賊のような恐ろしい存在になるかもしれないことを自覚するようにと説いているように思えます。

みなさんは、この詩に出てくる海賊はどんな人だと思いますか。私は皆さんとは少し違うイメージを持っているかもしれませんが、このレイプされた女の子が十二歳であると同様に、私は海賊も十二歳の少年のように思えてならないのです。恐らく彼は極端な貧困のなかに生まれ、学校へはもちろん行けず、多分病院も無い村に住んでいるのでしょう。生きていることに希望も何も持てない、そういう人がこの海賊ではないかと思います。勿論、レイプや殺人は、人間として許されない行為で、厳格に裁かれるべきです。しかし、もし私が貧困の中に生まれ、学校には通えず、医療施設もなく、絶望と怒りの日々を過ごしていれば、海賊にならないという保証はどこにもありません。海賊を生み出す環境が改善されないかぎり、裁ききれないほど海賊は次から次へと生まれてきます。海賊を単純に「悪」と決め付け、彼らを抹殺すれば世界は安全になるという発想では、根本的な問題解決にはならないでしょう。

そもそも、今日世界で起こっている紛争の多くは、自分と異なる人々を「他者」として排除する発想に起因しているように思います。何度もいっていますように、仏教では「自」と「他」を二元的に分ける思考を「分別」といいますが、この分別的思考こそ、今日の紛争の根源にあるように思えてなりません。詩のなかの海賊と少女を例にとると、いったん海賊を「悪」という固定観念（ステレオタイプ）でとらえてしまうと、それはすぐに「彼ら」と「我ら」の区別を生み、「海賊＝彼ら＝悪＝敵」と「少女＝我ら＝善＝味方」という強固な対立構造を作り出します。そしてそれは「我ら善人を守るために」という名目で、「敵」と見なされた人々に暴力を行使することを正当化するために使われます。その結果、海兵隊を送り込み、海賊を皆殺しにすれば世界は平和になるという、あまりにも単純な発想に根ざした政策が取られるのです。残念ながら、今のアメリカ政府はこのような論理を用いて「テロとの戦い」を正当化していますが、それは今日の世界に大きな悲劇をもたらしていることは明らかです。

しかし仏教の縁起思想は、このような対立構造を超え、暴力を克服する道を示唆してくれています。それを論理的に説明しているのが『華厳経』に由来する華厳宗の「法界縁起」の思想です。これは簡単にいうと、宇宙のすべてのものが互いに因となり縁となり存在しているという思想です。つまり宇宙全体が深いところで繋がっていて、宇宙を形成するすべてのものが互いに関係しあいながら成り立っているという思想です。あるいは、すべてのものが一体化して（つまり仏教教理の用語を使えば「相即」して）、お互いに和しあって（つまり「相入」して）、宇宙が成り立っているという思想であるといえます。『華厳経』では、このことを因陀羅網という一つの網の比喩を使って説明しています。ここでいう因陀羅とは、インドのインドラ（つまり帝釈天）という神さまのことなんですが、この因陀羅網とはインドラの住む宮殿を飾る網のことです。この網はたいへんすばらしいもので、網の結び目の一つ一つから宝珠が垂れ下がっています。そして、ここが重要なポイントなんですが、その一々の宝珠には、他のすべての宝珠は映し出されています。つまり、すべての宝珠が他の全ての宝珠を映しだし、無限に展開しているわけです。これが因陀羅網というものなんですが、これが何を象徴しているかというと、宝珠がお互いに映しあっているように、宇宙の全てのものが互いに関連しあって存在しているということを象徴しているわけです。このような考えに立ちますと、宇宙のいかなるものでも、それだけで孤立して存在するのではなく、みなお互いに関連しあって存在しているということが分かります。そして宇宙のどこかでなんらかの事件が起これば、宇宙が一体として有機的に関連していますので、その影響は宇宙全体に及ぶということになります。そういう意味で、目には見えないけれど深いところで宇宙全体が繋がっていてお互いの関係性の中で存在していることになります。このような考えを法界縁起というわけですが、これこそティク・ナットハンの一番言いたいところなんですね。

ティク・ナットハンの詩のタイトル、「どうか私の本当の名前で呼んで下さい」は、この事実に目覚めよと、私たちに語りかけているのです。この詩の最後の部分を、もう一度読んでみてください。

どうか私の本当の名前で呼んで下さい
私の泣き声と笑い声のすべてを同時に聞くことができるように
私の喜びと苦しみが一つであるということがわかるように

どうか私の本当の名前で呼んで下さい
私の目を醒ますことができるように
そして私の心の扉を
慈悲の扉を　開け放つことができるように

ここでいう「私の本当の名前」とはどんな名前でしょうか。この詩のタイトルにもう一度注目してください。原文の英語のタイトルは「Please call me by my true names」ですが、日本語では「どうか私の本当の名前で呼んで下さい」となっています。残念なことに、日本語訳のタイトルでは、訳しきれないところがありますが、それはお分かりですか。Namesは英語で複数になっていますが、日本語では「名前」が単数か複数化は分かりません。しかし英語のタイトルを見ると、「名前」は明らかに複数なんです。これは何を意味するか。私の本当の名前は複数あることになります。普通、私の本当の名前は一つしかないと考えていますが、ティク・ナットハンは複数あるといっているのです。もっと詳しく言えば、私の本当の名前は無限にあるというのです。それは仏教の法界縁起が説いているように、宇宙全体が互いに関係しあって成り立っているのであれば、宇宙のすべての人や生き物は私の一部であり、そのためそれらの名前も実はみな私の名前でもあるからです。私の親からもらった名前はロバート・ローズですけれども、より根源的にいえば、私には他にも無数の名前があります。当然、あの十二歳の少女の名前も、彼女を死に追いやった

海賊の名前も、私の名前でもあるわけです。またウガンダの飢えた子供の名前も、武器商人の名前もそうです。さらに、もしかげろうや鳥に、あるいは蛙や蛇に名前があるとしたら、それらの名前も私の名前です。みな深いところで関係しあって、お互いの関係性の中で生きているのですから、全ての名前が私の名前であるというになるんですね。全ての宇宙にいる生き物の名前が、私の名前であると。もちろん、これは私だけに限ったことではありません。昨今の政治の世界の例を出すと、ブッシュ大統領の本当の名前は「ジョージ・ブッシュ」だけではなく、サダム・フセインでもあったり、オサマ・ビン・ラディンを初めとしてアルカイダのすべてのテロリストの名前でもあったりするわけです。自分が最も憎いと思っている存在であっても、本当は自分の一部でもある。そういう思想がここに込められているのでしょう。

そういうことに気がついて初めて、「敵」や「見方」の対立を超えて、すべての人々の悲しみや喜びを共有し、本当の意味で他者を尊敬し、一緒に生きていくことのできる世界が開けてきます。これこそ、ティク・ナットハンがこの詩のなかで、最も訴えたいことではないでしょうか。この事実に目覚めによって、今の世界に蔓延しているさまざまな暴力を根源から乗り越え、世界の紛争を解決してゆく一歩が踏み出せるのであると、彼はここで訴えています。これこそ正に仏教の長い伝統の中から生まれてきた考え方でありますし、まさに今の混迷の世界に発信していかなければならないことだと思います。ですから皆さんは、これから四年間、この大学で勉強していくわけですが、ちょっと大袈裟ないい方をしますと、この地球の将来は、皆さん一人一人の肩に掛かっていますので、そういうことも視野に入れながら勉強していっていただきたいと思っています。

ちょっと長くなりましたが、ここで終わらせていただきます。長時間ご清聴ありがとうございました。

（本稿は、二〇〇八年四月十八日（金）にメディアホールで行われた講演を加筆訂正したものである。）